

(7)(8)(9)(10)(11)(1966-6-14/6-28/7-5/9-13/9-20) Lessing
(7)1966-6-14

Lessing の活動

1740 年に即位した若きプロシヤ王 Friedrich の時代に、ドイツ文学はのちに古典主義文学として開花する土台を作った。というのは当時の思想である啓蒙主義(Aufklärung) の文学において、詩では Klopstock(Friedrich Gottlieb 1724-1763) が、小説では Wieland (Christoph Martin 1733-1813) が、そしてドラマでは Lessing (Gotthold Ephraim 1729-1781) が現れてそれぞれ画期的な作品を発表したからである。

Klopstock の最大の作品は"Messias" (1773) である。これはキリストの犠牲による人類の救済をうたった叙事詩であり Hexameter からなる。Klopstock はその他多くの Ode (頌歌) を作って、当時の風潮であるフランス文学その他のローマン系文学に学ぶことに反対し、真にドイツ的詩人として活動した。

Wieland は快楽主義的处世訓と優美によって当時の人々に影響を与え、フランス趣味に傾くドイツの上流人士をドイツ文学に共鳴させた功績は見逃せない。彼は元来叙事詩人であり小説に長じ、教養小説 "Die Geschichte des Agathon"(1667) や風刺小説 "Die Abderiten"(1774-1781) などでドイツ文学を富ました。

Lessing は 1729 年 1 月 22 日、Kamenz という町で牧師の息子として生まれた。Meißen の Fürstenschule 及び Leibzig 大学で学び、専門の神学を勉強するよりもむしろ Neuberin 一座の俳優と親しく交わり、19 歳の時、その一座によって彼の喜劇 "Der Junge Gelehrte" が上演された。その後間もなく神学の勉強を放棄し、ベルリンに出て自由文筆業者として生活した。彼は Berlin で Voltaire(1694-1778) を知ったが、主に Berlin の啓蒙主義者と交わった。ことに書店主兼出版業者 Nicolai(Friedrich 1733-1811) 及び道德哲学者 Mendelssohn(Moses 1729-1786) と親交を結んだ。

7 年戦争が始まった時、将軍 Von Tanentzien の秘書として Breslau へ行き、そこで将校らと生活をともにした。その間 Breslau 図書館の文献をあさって、後の評論 "Laokon oder über die Grenzen der Malerei und Poesie"(1766) や劇の "Minna von Barnhelm"(1767) を

制作する準備を整えた。戦争終了後、彼は Berlin の王室図書館の館長となることを望んだが、失敗した。その時たまたま Hamburg の劇場支配人 Löwen(Johann Friedrich 1727-1771) の国民劇場設立の計画が熟して旗揚げすることとなった。そして Löwen が Lessing を顧問兼 Dramaturg として招いたので、彼は 1767 年 Hamburg へ移住した。そして同年 4 月 22 日に産声を上げた国民劇場は、結局失敗に帰し解散した。その理由の第一は観客がだめだったことである。長い間、低級な在来劇やフランス劇の模倣に慣れてきた観客は、この劇場の出し物に興味を覚えず、フランスの劇団が Hamburg へやって来ると、挙ってそちらを見物に行く有様であった。また第二の理由は、劇団内部の欠陥、すなわち俳優同士の内紛、出資者の我が儘、女優の横暴などであった。そしてせっかくの理想も水泡に帰したが、この機会に Lessing の "Hamburgische Dramaturgie"(1769) が残っただけでも意味があった。

その後、彼は魏ーンやローマへの移住を計画したが成功せず、Braunschweig（侯国）の皇太子の薦めによって Wolfenbüttel の図書館長となった。ここで彼は宗教の根本問題についてプロテスタント教会の代表者と論争したが、一方で劇の "Emilia Galotti"(1772) や "Nathan der Weise"(1779) などを完成した。彼の晩年はすこぶる悲惨であって、結婚後 14 ヶ月で生まれたばかりの赤子と妻とを相次いで失った。そして後にはほとんど盲目となり孤独な生活を送ったが、精神的にはしっかりしていた。常に努力する Faust をえがこうと計画したが、断片を残しただけで完成しなかった。けれど、この Faust のように絶えざる努力と人間の価値を見るのが、彼の精神の特徴であった。

(8)1966-6-28

Hamburgische Dramaturgie（ハンブルク演劇論）

国民劇場での上演の批評その他を載せるために Lessing が発行した全紙半枚ばかりのパンフレットで、1767 年 5 月 1 日から同年 8 月 15 日までは毎週二三号ずつを出したが、同日以後、発行が遅れがちで不規則となり、翌 68 年 4 月 19 日に 101 号から 104 号までの合併号を出してのち廃刊した。それが後に纏められ 2 巻 519 ページの一冊本として出版された。これは、国民劇場で上演された 52 の作品につき論じたものである。内容によって劇の幽霊論、悲劇論、歴史劇論、市民悲劇論に大別することが出来るが、その

中で悲劇論は最も大部であり最も重要である。

Lessing は悲劇について、第48回公演として上演された *Weißes* の "*Richard der Dritte*" について議論を展開し、以下83篇にかけて論じている。そしてアリストテレスが悲劇を定義して「悲劇は一種のまとまりと偉大さを有する動作(*Handlung*)の模倣であって、その効果は、同情と恐怖の念を引き起こすことによって、この種類及び他の種類の情熱からの浄化作用をもたらすことにある」と述べた言葉の中で、同情と恐怖が、同情と驚愕と訳されているのは重大な誤りだと指摘した。すなわち驚愕(*Schrecken*)は突然恐ろしいことに会い恐れることで、恐怖(*Furcht*)は未来に何か良くないこと、恐ろしいことが起こりそうな予感がする不安や心配を意味するとして、我々自身の上に降りかかってくるかもしれないという風に恐れる不安な心持ちであるとした。すなわち自分が同情の対象になることもあるかもしれないということから生ずる恐れである。これは言い換えれば我々自身に対する同情である。アリストテレスはだからこの恐れと同情とは無関係な独立した感情でないこと、すなわちあるいは一緒になったり、あるいは離ればなれになることがないのを言い表している。これを *Corneille*(*Pierre* 1606-1680)は誤訳し離ればなれの感情と思いこんでいるから、いろいろ間違った議論をしていると指摘した。彼はまたアリストテレスの定義からして、悲劇の主人公は凶悪な非人間であってはならないという要求が必然的に生まれるとした。*Richard der Dritte* のごとき残忍な殺人者は、悲劇の主人公に適さない。同情と恐れの対象にはなり得ないと論じた。彼は全然芝居にならぬ救われない人間である。しかしそのような悪人が受ける報いの際、我々は全然無関心ではあり得ない。処刑されようとする瞬間、見る者の胸にこの人間が救われないだろうかという思いが起こらなかっただろうかと論じて、こうした不幸や苦悩や滅亡を面前にして起こる同情が *Philanthropie* であり、人類愛であるとした。

さらに Lessing はシェークスピアの劇と比較してフランスの劇、ことに *Voltaire* のその無価値なことを強調した。そして Drama というものは、我々と同様の発展する性格の人間と出来事を述べなければならないと要求している。そのような Drama だけに我々は感銘を受け、同情と恐れを感じ、それに共生(*mitleben*) すること

が出来るとした。また時と場所と動作の3つの単一(Einheiten)のうち、動作の単一だけが第一義的なもので他の二つは第二義的なものであるとした。そしてこの点でもフランス劇は時と所の単一だけを心がけて、しかもむやみに陰謀や事件を取り入れ、劇的動作を混乱させていると攻撃したのである。

Lessing の演劇論に述べられた理論を、実際の作品において実現したのが彼の Drama である。"Miss Sara Sampson"(1755)は Lessing が26歳の時の作品で、5幕の市民悲劇である。Lessing が人物の名や場所や風習をイギリスに取ったのは、当時 Lessing が盛んにイギリスの劇を研究していたことを示している。そしてまた従来 Drama に欠くことが出来ないとされていた形式 Alexandriener の韻律を捨てて散文で書いている。このドラマの筋では Wiliam Sampson の娘 Sara は世間知らずであり、放蕩者の Mellefont の甘言に乗せられ両親の家から連れ出される。Mellefont は彼女を愛しているが結婚を躊躇している。それは結婚の束縛を好まないとともに、以前から関係ある妖婦的な未亡人 Marwood にまだ心惹かれているからである。Marwood は再び彼を虜にしようとするが、Mellefont が Sara を愛していて思うようにいかないのを見て、二人が駆け落ちして隠れているところへ出かける。ちょうど Sara の父親が二人のことを許し結婚させるためにやって来たとき、Sara をも殺してしまう。Sara は死に臨んで自分を殺した Marwood を弁護し、その罪を許して死んでいった。Mellefont は彼女の言葉を聞いて「なんと不思議な感情が私を掴むことでしょう。おお神よ！お慈悲をお与え下さい」と叫んで、Sara の死体のそばで自殺するのである。

感傷的な勧善懲悪的な台詞があったり、道徳的な省察が入り交じっているのは、当時の流行を脱したものであるとは言えないが、人物の性格描写は自然で人間味に富んでいる。

前に述べたごとくグリフィウスの"Cardenio und Celinde"において登場人物が市民である関係から、市民悲劇の先駆をなすものと言えるが、一般的にはこの Lessing の Miss Sara Sampson が市民悲劇の最初の作であると見なされている。

(9)1966-7-5

"Philotas"(1759)

Philotas は一幕の悲劇で8場からなり、登場人物はスパルタの王

Aridäus、Aridäus の将軍 Strato、捕虜の王子 Philotas、及び兵士 Parmenio の 4 人である。このドラマは王子 Philotas が初陣で敵の中に入りすぎて包囲され、負傷して捕らえられ、王 Aridäus の陣中で捕虜として暮らしている。そして独白で自分の武運の拙いことを嘆いていると、Strato がやって来て王命だと王の前へ連れていく。王の Aridäus は Philotas に向かって、若い時おまえの父親と友人であった、また自分の息子も捕虜としておまえの父の許にいることなどを告げる。その後、兵士の Parmenio がやって来ていろいろ話した末、王子が捕虜となっていることを父の王に告げに帰ることと決定した。その結果、両国の間に息子を交換する約束が成立し、Aridäus 王がそのことを Philotas に告げ、剣を渡させた。Philotas は自分の交換で父の王が不利な条件を押しつけられないようにと、自ら剣で胸を貫き自殺することを扱った一種の愛国劇である。Philotas が英雄的な死を遂げるに至る迄の心理状態が、独白を通して細かく描かれた作品である。

またその死を見て王の Aridäus が

"Komm! Schaffe mir meinen Sohn! Und wenn ich ihn habe, will ich nicht mehr König sein." と叫ぶ言葉に Lessing のヒューマニズムが感じられる。

"Minna von Barnhelm oder Soldatenglück"(1763)は 5 幕の喜劇 (Lustspiel)だが、評家によってはドイツ人に送られた最初の Lustspiel だとさえいう人もある。

これは 7 年戦争の最中に、ある令嬢と婚約した将校が負傷して不具者となる。かつ冤罪のため免官となり落ちぶれ果て婚約を解消しようとする。訪ねあててきた令嬢の援助も名誉心から拒否するが、令嬢はトリックによって将校の義侠心に訴え、将校との愛を復活させる。ちょうどその時、令嬢の後見人の公爵が訪ねてきたり、冤罪がはれて皇帝の勅書が出るという知らせが来て、二人は喜びの抱擁を交わす。また将校のために骨を折ったもとの部下の曹長も、令嬢の小間使い Franziska と結ばれるという二重の喜びに終わるドラマである。

この作品は登場人物が生き生きと描かれている。すなわち主人公 Tellheim の男らしく高尚なこと、Minna が愛らしく親切なこと、小間使いの Franziska が元気で機敏なこと、曹長の正直さ、従卒の Just が狡いこと、及び宿屋の主人の軽薄さなどが巧みに描かれてい

る。それとともに気高い人間性や心の清らかさや、人間の弱点に対するユーモラスな風刺、洗練された対話などによってすぐれた国民的作品であることは勿論だが、Lessing の身の事件に取材してこれだけの劇が作り上げられたことは、当時としては注目すべきことであった。この作品が当時の人々に与えた影響は「この作品がああ暗い時代に現れたとき、我々青年にどれほどの影響を与えたことか、まことに流星が輝き現れたのであった」という Goethe のエッカーマン(Eckermann)への言葉で想像できる。そしてドイツにおいてこの作品と比肩できる喜劇は、Kleist の「割れ壺」、グリルパルツアーの"Weh dem, der lügt", Hauptmann の"Der Bibelpelz"などにすぎない。

"Emilia Galotti"(1772)は5幕の市民悲劇である。

舞台はわざとイタリーの Guastalla に取られ、このドラマが当時のドイツの小侯国の現実から生まれたことは明かであり、たぶん風刺的意味を持っている。このドラマの筋は Guastalla の Prinz が家来の Odoard の娘 Emilia をある夜会で見初め、その意を受けた侍従の Marinelli が Emilia を婚約者の Arpioni 伯の手から奪って別荘に誘拐させる。父 Odoard が駆けつけてきて、Prinz の別荘で出会った Orsina 伯爵夫人からことの次第を聞き、短刀を受け取る。Emilia は父に向かって誘惑に打ち勝つ自信がないので、むしろ死にたい・・・父に殺してくれと迫った。Odoard は始め躊躇したが、娘が自ら死のうとするので胸を刺して殺す。この有様を見て Prinz は侍従に罪を転嫁し、Odoard は短刀を Prinz の前に投げ出し、死んで誰もが行く天使の前で会いましょうと言うのだった。これは Hamburg 演劇論の後に出来た作品であるだけに、そこに述べられた理論の実践であるといえる。人物の配置と筋の運びには隙がなく、構成があまりに技巧的すぎると一部の者に非難されるほどである。

Goethe は師のヘルダーに「Emilia Galotti も考えて作られたもので、そのどこにも偶然とか気分とかは織り込まれていません。人並みの悟性があればすべての場面から、否、あらゆる言葉からその理由を引き出すことが出来ると言いたいほどです。これは本来の傑作ではありましたが、私は余り好みません」と書き送っている。

このドラマの沿革は Lessing が 1757 年にローマの歴史家 Livius

の Virginia 物語りに心を惹かれ、ドラマを書き出したことに始まる。1758 年 1 月、親友のニコライ(Nicolei)に宛てた手紙で言っているごとく、Virginia 物語から国家や政治に関することを取り去り、一人の娘が貞操の危険から逃れようと、父親に殺されるという純粋な悲劇作品を創作しようとしたのであった。初め 3 幕物として描いたが完成せず、放置され、14 年後に再び取り上げ、上演を目的として書かれたが、これまた完成せず、Lessing が Wolfenbüttel の公爵家の書庫係をしている時代にやっと完成した。そして 1772 年 3 月 13 日、公爵夫人の誕生日に初演された。Lessing は娘の名誉を守るため父親が子供に手をかけるところに、人間としての最大の悲劇を見た。かつまた Emilia をして人間的自覚、すなわち誘惑に勝つことが出来ない自己の弱さを自覚して、進んで父親に刺し殺されることにしたところが市民悲劇であるゆえんである。

この作においてもまた人物の性格が鮮やかに浮かび出ている。すなわち温順と敬虔を具現した Emilia。専制的で当時の諸侯の気風を代表しているが、同時に気の弱い Prinz。短期で頑固ではあるが曲がったことの嫌いなドイツ的な Odoard。虚栄心は強いが優しい母。これらに対するに、Prinz への愛と憎悪心に燃え立つオルシナ伯夫人。策謀を好み陰険な悪事をたくらむ悪人マリネリーの、当時としては異常な性格の所有者を配している。ことにオルシナ夫人の心理解剖などは近代的なドラマといえる。このドラマのテーマは、シラーの"Kabale und Liebe"(たくらみと恋)以下の市民悲劇の主流に伝わっている。

(10)1966-9-13

Lessing の 1779 年の作"Nathan der Weise"はドラマの形を取る教訓詩である。Lessing は以前、"Rettung des Cardanus"を書いたが、この時、既にこの作品の根本思想を心に抱いていたと思われる。Cardanus(1501-1576)はイタリアの哲学者で、その著書で 4 つの宗教、すなわち異教、ユダヤ教、キリスト教及びマホメット教を 4 人の人物で代表させ、各自に自分の信仰を擁護させ他の宗教を攻撃した。そのことを正統派の人々は攻撃し Cardanus を無神論者だとした。Lessing はこれを公平を欠いた処置であると考え、前記の Rettung des Cardanus でユダヤ人及びマホメット信者にそれぞれの信仰を弁護させた。この時すでにこのドラマのテーマを戯曲化しようという考えが兆したようだ。しかし制作に取りかかったのは

1776 年頃らしいが、この作品は意に満たず、1778 年 8 月、再び校を起し 10 ヶ月経って完成した。これより先 Lessing はハンブルクで H.S. Raimarus の友人たちと知り合いになり、その中のエリーザによってライマルスの著書『神の崇拜者のための弁護』を読み、Lessing が当時在職していた Wolfenbüttel 公国図書館の文書から発見したようにして、その二三の断片を"Wolfenbüttler Fragment"と題して公にした。当時の神学者らはこれを問題とし、Lessing が仮名で発表したものとして攻撃した。Lessing はもともと Raimarus の意見に全面的に賛成でなく、むしろ反駁を加え発表したほどであったが、この攻撃に極力応戦した。なかんずく牧師の Goeze と最も激しく論戦し、"Anti-Goeze"の 14 の論文によって完全に Goeze を沈黙させた。ところが正統派の教会は公爵を動かし、Lessing の神学に関する一切の書き物を没収し、検閲免除の特権を剥奪した。しかし Lessing はこれに屈せず、得意とする Drama で自分の説教を続けようとした。その結果、この作品が制作された。このような執筆の動機からして、この作品が大きな問題を含み、思想詩的教訓的な傾向を帯びたのは当然である。

この作品は 5 幕のドラマで、富豪で賢者と噂されるユダヤ人のナータンが商用で旅行中、家が焼け、Nathan の娘 Recha は、当時回教徒の捕虜 Sulthan から行動の自由を許されていた Tempelherr に助け出された。帰ってきてこれを聞いたナータンが、その Tempelherr に謝礼を申し出たが、Tempelherr はナータンがユダヤ人だという理由で相手にしなかった。しかしナータンの情理を尽くした話に感心し、娘の Recha に会う約束をした。一方財政難に陥っていた Sultan の Saladin は、妹の献策によりナータンを難問で困らせ、それにつけ込み財政上の援助を得ようとナータンを呼びよせ、異教、キリスト教、マホメット教の内、どれが本物で一番満足を与えるかと聞いた。ナータンは熟考の後、直接答えることを避け、3つの指輪のたとえ話をする。宗教はどれが真の宗教でどれが偽物であるかということは出来ない。どれも神に至る道であるという意味を寓した。そこでサルタンは感じ入りナータンと親交を結び、その後ナータンが養っている娘 Recha は Tempelherr の妹であって、その父は Saladin の弟の Assad であり、二人は Assad がキリスト教徒の婦人に産ませた子であることがわかり、喜びの内にこの劇は終わる。

この作品の根本思想は信教の自由への関心と寛容の思想である。**Lessing** はこの思想を第三次十字軍時代のエルサレムにおける3つの代表的な宗教を代表するナータン、**Tempelherr**、総大司教、及び修道僧、及びザラディンなどの対話や動きによって展開している。ナータンはユダヤ人であるが故に、キリスト教徒の迫害によって7人の息子を殺されたこともあるが、厳格で非寛容的な宗教組織の人となって、しかも極めて寛容な人間となった。彼には誹謗、迫害はかえって真実性、博愛、自己否定、没我献身の勝利に役立つのだった。すなわちキリスト教徒による迫害にもかかわらず、実際にはキリスト教徒の子である **Recha** を養い我が子とし、キリスト教を奉ずる白人の女 **Daja** を家庭教師としていた。ナータンが **Saladin** の問いに答えて3つの指輪のたとえ話を物語る場面は（第3幕の第7場）、このドラマの中心をなす。ことに自分の指輪が本物であると言い互いに争う兄妹に対し諭す裁判官の「その父親はおまえたち3人を間違いなく愛していただろう。同じ様に愛していたのだ。一人を恵むため2人を虐げることをしたくないなら、さあ誰もが公正な偏見に捕らわれない父親の愛に習え。おまえたちめいめいが指輪に潜む石の力を表すように競争するがよい。心から優しさと、善行と、神への帰依によってこの力を助けるがよい」という言葉は、**Lessing** の根本思想の現れである。このナータンの話に感じ入ったザラディンは「ナータンよ、愛するナータンよ、おまえの判官の言う幾百年はまだ経っていない。その裁判の席はわしなどのつくべき席ではない。行くがよい・・・しかしどうかわしの友人になってくれ」と言うのであった。

このドラマの意義は以上のような思想をあらわす教訓詩である以外に、形式的にも革新性を有する。すなわちこの作品は韻を踏まず、いわゆる **Blankvers** すなわち無韻の5脚短長格詩(**Jambus**)で表わされている。これは **Lessing** がドラマの句は朗読されてはならない、話されねばならない、**Blankvers** が近代俳優の速い話しぶりを表すものとして必要だと考えたからである。

このドラマのリズムである **Jambus** は、この後 **Goethe** の"**Ifgenie**"や **Schiller** の"**Don Carlos**"及び"**Wallenstein**"などで更に一層の改良を加えられて以後、ドラマの形式として用いられることになった。それ故、外形的形式でもこのドラマは画期的な作品である。

(11)1966-9-20

Lessing が Faust 劇の制作を思い立ったのは Leibzig で Faust 劇を見、さらに 1753 年 Berlin で "Faust von Teufel gehold ward" を見て嫌悪を覚えたからである。Miss Sara Sampson の完成直後に着手し、28 歳から 39 歳までの間、3 回も草稿を作っている。そして常に、間もなく完成し上演される見込みだと述べている。その第一の草稿に着手したのは、ドイツ文学に関する初刊を著した Berlin 時代に当たり、1759 年第 17 文学書簡中に第 2 幕の第 3 場が印刷されている。次は Breslau 時代(1760-1765)で、この時にはアリストテレス Szene が生まれた。第 3 の時代は Hamburg 時代である。1767 年 Lessing は Hamburg から兄弟の Karl に宛て、Faust をこの冬の内にも上演させるだろう、少なくとも私は全力を挙げていると書いた。しかし一年後、詩人の Ebert が Doktor Faust はどこにあるかと問うたのに対し、Lessing はあなたの友情ある脅迫に対する私の答えをあなたは推量できるでしょう、すべての乞食とともに絞首吏のところへ行くところですと答えた。この言葉は Lessing が 3 回目 Faust に取り組んだものの、わずかししか校を進めることが出来ず、間もなくその完成の意志を捨てたことを意味すると思われる。この言葉からアリストテレスの場面を除いて、他の草稿を破り捨てたことも理解できる。しかし Lessing はその後、Wolfenbüttel 時代にも二三の友人に Faust の計画を述べたと言われる。そして同年(1775)のイタリー旅行に、旅先で仕事をするつもりで若干の原稿を携えていった。Karl Lessing によると、ウイーンから 40 の新しい Fabel の他 Faust の断片の入った箱を送ったが、輸送の途中で紛失した。もっとも Lessing の友人の一人 Hauptmann von Blankenburg は、Lessing は Faust を完成しそれを Dresden への旅行に携えて行き、ここで他の原稿と一緒に箱に納め、ある御者に託して Leibzig の親戚の商人に送り、さらにその商人が Wolfenbüttel へ送るはずであったが、荷物が親戚へ届かなかったと言っている。またエンゲルス(J. J. Engels)も Karl 宛ての手紙でこのことを述べている。そしてさらに失われた部分を自分で補おうと試みたと言っている。いずれにしろ Lessing の原稿は紛失したのか、Lessing 自身によって焼却されたのか不明である。Lessing 全集の中にはその断片の 2 つの場面と、Blankenburg と Engels の文章が納められている。

その一つは Vorspiel と第 1 幕第 2 場で、Faust が地下から姿を現

した Geist と問答をする場面である。Faust が Wer bist du? と問うのに対して Ich heiß Aristoteles. Ja, so heiß ich. Wie ist mir? と答える。そして結局姿を消してしまう。このアリストテレスと呼ばれた霊は、アリストテレス哲学の Entelechie と関係づけて考えられている。

その二は第2幕の第3場である。これでは Faust と7つの霊が登場する。Faust はその霊の中から一番速いものを選び出そうとして、そのひとつひとつを呼び出し速さを聞く。そのうち5番目の霊が人間の考えと同様に速いというのに対して、Faust は Aber nicht immer sind die Gedanken des Menschen schnell. と言っている。これは Lessing が自分自身を知っており Geist を信頼しないことを示す。また第7の Geist が速さは善から悪への移りゆきより多くもなければ少なくともないと言うのに対し、Faust は Du bist ein Teufel. 善から悪への移りゆきと同じ速さだなんて、そうだそれは速い、その移りゆきより速いものは何もない、立ち去ってしまえ、冥界(Orkus)のカタツムリ(Schnecken)よ、と言うところで終わる。

民衆劇では Faust を地獄へ導くものは人間の考えから出る知識欲だったが、Lessing にとっては、それは人間の思考ではなく善から悪へ、神のように清いものから利己的な考えに帰る誘惑の力だった。Lessing がもしこの断片を完成すれば、決して永遠の呪いに終わらせなかったことは明かである。Lessing は道徳的啓蒙主義の詩人だったから。

Blankenburg はその文章で、自分が読んだと証する Lessing の Faust の概要(Skelett)を紹介している。場面は地獄の霊たちの会議の場面であって、若い悪魔が最高の悪魔に向かって、地上での企てや実行したことを報告している。最後の悪魔が、自分は少なくとも何物にも満足しない一人の男を見つけた。その男は熱情も持たず弱点もない。ただひとつ彼は、消すことの出来ない知識欲をもっていると述べる。すると悪魔の頭は、それなら彼は永久に自分のものだという。そしてメフィストフェレスが Faust を捕らえる役を割り振られた次の幕で、メフィストの活動が始まり、見たところ彼の仕事は完成間近だった。そして仕事を終わったと思った悪魔たちは、第5幕で声を合わせて勝利の歌を歌う。すると上の世界から天使の声が響き、凱歌をそうするな。おまえたちは人間や学問に勝ちしなかった。神は人間に、彼等を永遠に不幸にするために、最も気高い衝動を与えはしなかった。おまえたちの見た

ものは、そして今もっていると思うものは幻影にすぎないのだと言った。

Engels もまた Blankenburg の主張を繰り返している。予言の天使が我々に、厳かなしかも優しい言葉で、悪魔の努力が無駄だったことを告げている。おまえたちは勝ちもしないと天使の言葉で告げている。Engels はそれから Lessing の計画を補ってさらに次のように言う。天使は Faust を深く眠らせ、彼の代わりに幻を作り悪魔に、悪魔が完全に我がものと思った瞬間、それが消えてしまうまで幻を弄ばせるのだと言っている。

これらの報告によって、Lessing は Faust をふたつの性質に分けて描いたことがわかる。すなわち幻として誘惑しやすい低級なものと、そのエンテレヒーが天使に保護されている Faust である高級なものに分けて描いている。ここに述べられている Faust は実際の活動家ではなく、無意識に眠っている者である。彼の救いは自由な活動の結果ではなく、天使の叫びによる救いだった。だからこのドラマは Faust をアリストテレスの詩学で言う意味の悲劇的主人公としては表していない。従ってアリストテレスの考えに基づいて構成されている Lessing の世界像と矛盾する。ここに Lessing がこの Faust 劇を完成しなかった理由があると思われる。

ゲーテの Faust は Lessing の詩人としての夢を満たしたものということが出来る。ゲーテが Faust が天使によって救われる場面を作ったことがその証明である。"Urfaust"の主人公は、最後にメフィストフェレスとともに呪ったり罪を犯したり墮落し没落するが、天使による救いの考えは、イタリー旅行中にゲーテの頭に浮かんだことである。この時は、Karl Lessing に出版された"Theatralische Nachlaß"を含んだ Lessing の全集が 1786 年に出版された後のことである。アリストテレスの場面と天使の勝利の叫びの報告を、ゲーテは疑いもなく知っていた。これがゲーテをして Faust 劇の計画を続けさせ、最後の幕の Faust の霊が天井へ上る場面を思いつくのに役立ったものと思われる。